

# 武田昭さん

1934(昭和9)年5月15日生まれ

民間人

被災地 東京



## ●親戚の家をたらいまわしになる

恐らく1936(昭和11)年頃、父親とお袋は、2歳くらいの私を連れて北海道紋別から東京麻布にでてきました。お袋は、入居先のアパートを持っていた材木問屋にお手伝いに出て行ったきり、帰ってこなくなりました。親父は船の荷揚げをされていて、芝浦なんかには仕事を探しにいたりするから、昭を一人で置いてく訳にはいかないってんで、親父の兄さんの家に私を預けたんです。私は、親父が迎えに来ないかなって、部屋の隅の方でしくしく泣いて。その家には子供が5人もいて、親父がちゃんと月々の手当てを持ってこなかったもんですから、もう面倒みてられないとなって、次に親父の姉さんが赤羽にいたので、そちらに行った。そこは旦那さんは少尉とか中尉とかそういう立派な家。旦那さんは戦争に行っ、お母さんと長男が暮らしていました。そこも出されて、そしたら今度は岩手県の花巻に。そんな風に親戚をぐるぐるたらいまわしになりました。

## ●親戚父が亡くなり、霊源寺(品川区荏原1丁目)に預けられる

1943(昭和18)年、父が39歳で亡くなりました。東京の荏原病院。私は9歳くらい。荼毘をするのに、品川区の桐ヶ谷の火葬場へ行きました。親父の家のお墓は岩手にありましたが、戦争中で、朝晩並んで切符とらないと列車に乗れない時代ですから、親父のお骨は隣の霊源寺に預けました。親父の兄さんが近くの日黒区にいて、「この子は一人ぼっちになってしまったんで、面倒みてくれ」と寺に預けられた。そのときから小坊主として修業をしはじめました。頭丸坊主にして、お経を習って。それまで転々としていたから、ほとんど学校に行っていなかったです。

戦争が激しくなると、蒲田とかの軍需工場から死んだ人が運ばれてきて、社員の人たちが寺で通夜をして翌日桐ヶ谷の火葬場で荼毘に付していました。それこそ毎晩のように。食べるものがだんだん無くなってくる時代だったんですけど、お通夜には食べ物が出ていました。私も白米のお握り二つくらいもらって。その他には、火葬場の隠坊さんが炉から集めた灰を、崖になっているところから捨てるんですが、お供えのご飯とお団子もそこに捨てる。私は夜になると拾いに行っ、部屋に持ち帰った。手あぶりの火鉢の灰の中に団子を入れると、いい匂いが漂ってきてね。

兵隊さんの遺骨を迎えたこともあります。桐の箱を抱えた軍隊の列が五反田の駅を降りて、五反田橋を通過、目黒川沿いに関係者と近隣のお寺のお坊さんたちが並んで。軍からお骨を預かる場所がありますかって言われて、霊源寺にも骨壺を収めた。

## ●1945(昭和20)年3月10日、東京大空襲

お寺の持ち主の住職の家が浅草の吾妻橋の近くにあったので、そこから霊源寺に通ってました。今船着き場があるでしょう。あの辺りはアサヒビールの倉庫があって、その前に家がありました。学校は不動前の裏にある国民学校に籍を置いていましたが、学校が疎開になったとき、お前は寺に残れと言われて疎開にはいかなかったです。

3月10日の大空襲で住職の家は焼けました。吾妻橋から向島の方に逃げようとしたんだけど、向こうからも人がどんどん来ていて、橋の上で衝突しちゃって、下は隅田川、熱いからぼんぼんぼんぼん人が飛び込んで。上からはどんどん火の粉がふってきて。私は橋の脇で身動きがとれなくなってじっとしていた。熱いなんてもんじゃない。

朝になったら墨田川の一面ウワーッと死体の山。明け方に、観音様の前を通過して田原町を通過して上野駅まで歩いて、当時は「省線」って呼んでた電車に乗って目黒に着いて、目黒から不動前の駅に出てきて寺に向かった。

## ●寺にひとり残された

その後、住職が亡くなってしまって、奥さんたちは実家に疎開した。自分は父親のお骨を守れっていう名目でひとり残された。生きてても死んでもどちらでもよかったんじゃないですか。5月頃に空襲で火葬場も全部焼けてしまった。大きな待合室と、車止めがあって、櫻が三本植わっていたけど全部焼けた。生垣の柵が燃える様子の凄さ。バリバリバリッと音がする。その中を一人でとことこ不動前のほうへ歩いていく。建物疎開で広場になったところにみんなワーッとあつまってきて、そこで朝を迎えた。朝になって戻って見たら、霊源寺だけが焼け残っていた。他にはもう何もない。焼野原の中でひとつだけ残った寺のお堂には、火傷したり酷い有様になった近所の人たちが逃げ込んでいた。「こんな目に合う筋合いはないよ」なんて泣いていた。その人たちも、そのうちばらばらといなくなって、ひとり。戦争が終わるまで何にも食べられなかった。

(取材日 2018年5月5日)